

届け 世界の果てまでも

令和2年 9月 8日

No. 30

文責 校長 飯久保一男

親も子どもに育てられる

「親はなくとも子は育つ」という言葉があります。「世の中のことはさほど心配したものではないというたとえ。」(大辞林)という意味ですが、言葉そのものから受ける印象は、子どもが育つには親がいらないという親の存在感の薄いもので、何とも親にキビシイ言葉のようにも聞こえます。

幼児期には親がいないと子どもはどうすることもできませんが、少年期に入るとそうではなくなっていくます。その時期に、いつまでも親が出しゃばりすぎると、子どもの成長のジャマをしてしまいます。3年くらい前に「過保護のカホコ」というドラマが人気でしたが、そのドラマの中の親のように、いつまでも子どもへの対応を変えない親は、子どもの成長や自立にとって危険な親になります。どの子ども親や家庭から大きな影響をうけて育つことは確かですから、親も成長する必要があるのです。

逆に「育てたように育つ」という言葉もあります。「子は親の鏡」という言葉もあります。我が家の息子どもを見ていても、そうだよなあ、そういうふうに育てたんだよなあと反省する部分が多くあります。イヤなところが、私にそっくりなのです。

きょうだいがいる家庭の親から、「上の子ども下の子ども同じように育てたつもりなんですけど…」という言葉が聞かれますが、私はそれはあり得ないと思っています。

まず物理的に違いますか。我が家では、生まれたころの写真やビデオの量が全然違います。長男の方が圧倒的に多くなってしまっています。

心構えとしても、1人目の子は親も慣れていないので、おろおろしたり、慎重になったりと神経質に育てるのが普通だと思います。2人目以降はその経験から、親に余裕が生まれ、放っておいたり、待つことができたりするなど明らかに育て方は違うはずです。また、下の子のほうに手がかかり、上の子には一人でさせるけど、下の子には親が手を貸してやるなど、下の子が甘やかされることがあります。それを上の子は見て育つのですから、上の子と下の子では育つ環境が違うのが普通です。そういう家庭環境が子どもの成長や性格、親への依存や自立に大きく影響しているのです。上の子と下の子では、同じ方針で育てたとしても家庭の環境が違っているのです。

「教員あるある」^{*1}の一つです。私は教員が自分の子どもを教えることは難しいことだと思っています。家で息子たちに学校の学習内容を教えることはありませんでした。家族で海水浴にったり、スキーに行ったりはしましたので、水泳とスキーは教えました。スキーは「指導」をして成功し、水泳は「教え」ようとして失敗しました…。

水泳の指導^{*2}は得意だと思っています。何人も水泳が苦手だという子を泳げるようにしてきました。ところが、我が家の長男を泳げるようにしてやることができませんでした。長男が小学校低学年の夏でした…。



妻に長男が泳げなくて困っているから「教え」てやってよ、と命令相談され、泳ぎの苦手だった長男を連れて楕形のプールに行きました。私の、ああしろ、こうしろという「教え」に始めは従っていた長男ですが、なかなか上達しないので、やがて、ふてくされ始めました。親はそういう態度には敏感ですので怒りがわいてきます。

私 「何だよ、泳げなくてもいいのか!」

長男 「泳げなくてもいい!!」

私 「そんなヤツは勝手にしろ!!!」 とケンカしながら家に帰って...

妻 「何よ、教えた子は全員泳がせたって威張っていたくせに…」



親子というのはそこに余計な感情が挟まるので、冷静に「教える」ことができなかつたり、冷静に「教わる」ことができなかつたりする見本のような展開になりました。その後、長男はスイミングスクールに入り、泳ぎは得意な子になりました…。また、担任の先生に「指導」をしていただいた結果であると思っています。



その年の冬、息子2人を連れてスキーに行きました。水泳での苦い体験を生かし、努めて冷静に、教員としての姿勢を保ってヤツらに「指導」をしました。その結果、長男から、

「父さんは、水泳の教え方はうまくないけど、スキーの教え方はうまい」

とヤツなりのほめ言葉（私にとっては「グサッ」とつきささる言葉）が出てきました。

親も子どもに育てられるものなのです。では、いつ育てられるのでしょうか。それは子どもが親の思い通りにならないときだと思っています。「もう…。全く言うことを聞かなくて…。」とは、よく聞く親の愚痴ですが、その言うことを聞かない子をどうしたらいいのかあれこれ考えるときが、親が育つときだと思えます。そのときが親のチャンスであり、子どものチャンスでもあると思うのです。子どもが思った通りにいなくて、おろおろする親であったり、強引に子どもをそうしようという親であったり…。そういう経験を通して、知らず知らずのうちに、親が育てられていくものだと思うのです。

私たち教職員は、小笠原小学校の子どもたちを愛しています。しかし、自分の子どもへの感情とは違いますので、冷静に見守ることができます。だから「指導」ができるのだと思っています。一番難しいのが自分の子を「教える」ことかもしれません。子どもとのやり取りのなかで、思いがけない行動にカッとなってしまうたり、どうしていいか分からずについ怒鳴ってしまったり、やさしくしてあげたいのに反射的に思いがけない言動をしてしまったり…など私の経験ですが、こうやって反省をくり返しながらか、親というのは子どもに育てられていくものなのです。

※1 「教員あるある」…ホームページ【学校長より】に「校長のつぶやき その8」を掲載中。本日「校長のつぶやき その9」を掲載。
 ※2 「水泳指導」…本紙No. 20に「カナヅチだった子が水泳記録会で優勝した話」を掲載済。ホームページ【学校だより】に掲載中。

息子たちが小さいころ、旅行のお土産で、ヒーロー物が好きだった長男には光と音の出る光線銃を、乗り物が好きだった次男にはバスのおもちゃ（長男のよりも値段が高い）を買って帰りました。長男は大喜び、次男はバスに見向きもせず、長男の光線銃をうらやましがりました。おかげでその夜、市内のコンビニに光線銃がないか探して回るハメになりました。結局、その日は次男をなだめ、次の日に、おもちゃ屋へ買いに行きました。

